



冬のイタリアで

新保 章

飛行機の中で

飛行機の中で

君の横顔を分断するように
窓の外には水平線が横たわっている
その色合いは落ちていく太陽に赤く

突然に翼を傾けて
天空に斜めに沈む飛行機
それに合せて太陽も
滑り落ちる速度を速めた

時間を飛び越えようとする試みが
何故か悲しく思っていた

○

クリスマスのもみの飾りの上で
天使たちがファンファーレを吹き鳴らす

そんな祝福された世界に
暮らしているとは
到底思えなくて

○

暗い画面を覗き込む
あなたの横顔が病的に青白い
輝いた眼球は爛熟した卵白のようだ

どんな痛んだ映像の
あなたは受信機になっている

○

いつの間にか朝焼けが
僕の瞳に沁みてくる
また逃れられない一日の始まりだ
休み足りない僕をまた
慌しい思いへと召喚する

○

光の天使が広い羽根を広げたような
滑走路に迎えられた
降りていく行く機首を暖かく包んでくれるようで

けれど近づくにつれてそれは
ありきたりの滑走路

飛行機は怒ったように
二、三回
地上を蹴りつけて
それから悲鳴を上げながら
地上に落ち着いた



*

イタリアの最初の到着地はミラノでした。日本から狭い飛行機の椅子に10時間以上座っていたので、やはり随分と苦痛に感じられました。

時差に体を慣らすためでしょうか、変な時間に飛行機の中が暗くなり、眠ることを強要されて、時間の感覚も少しおかしくなりました。寝たり起きたりを繰り返していたのですが、そんな合間に頭に浮かんだ短い詩をまとめました。何の脈絡もない断片の寄せ集めになっているのですが。

そんな退屈な飛行機の中の時間だったのですが、最後の方には何故かゲームに熱中してしまい、もう少し到着まで

に時間がかかればいいのにと、身勝手なことを思っていました。

霧深い街で（クリスマスの頃に）

霧深い街で（クリスマスの頃に）

夜の霧にむせて
白い咳を吐き続ける街では
歩く人影さえも亡霊のように揺らめいて
人の姿の実体を無くす

解き放たれて
闇に漂う人の情念は
深い針葉樹林を迷い傷だらけになり
顔をゆがませる咆哮には
庭先の犬たちも不安げに頭を抱える

生垣の柵も
緊張に実をますます赤く変えて
その葉が霜に縁取られて凍える頃にも
流れ星のイルミネーションは
沸々と消えることなく温もりを送り

その下に照らされると生気がこもり
血潮を取り戻す人の顔
傷だらけの皮膚さえもが
幻のように癒されて
白い息に乗せた感謝の祈りの言葉が
闇を震わせている

霧深い街の夜ごとの冷たさを
あなたの血潮が暖める奇跡を
祈る時分の敬虔さに
人の胸は打ち震えて

あなたの言葉をまた
枕元に復唱して眠る
何よりも闇から守ってくれる
刀剣のように胸に収めて

*

ミラノに到着したのは夕方の6時前だったのですが、外は陽も落ちてすっかりと暗くなっていました。ツアーに参加していたので、ガイドさんの指示にしたがって、そろってバスに乗り込みホテルに向かいました。

ミラノの街中は白い霧に包まれていました。道を行く人影もまばらで辺りの風景も霧に溶け込みぼやけ、どこか薄気味悪い感じさえしました。

それでもクリスマスの飾りつけの明るい輝きに、どこかほっとさせる気分でした。クリスマスの前後はほとんどのお店もお休み。家族と一緒にクリスマスをお祝いするのだそうです。敬虔な雰囲気を感じることができました。

ちなみに流れ星はキリスト生誕の時に賢者が見たと言うもの。そのイルミネーションが家の玄関や庭先などに飾られていました。



大聖堂で

大聖堂で

あなたは青白い光で体を包み
静かなまなざしで僕を見つめている
その高い高い静かな天空の高みに
僕が近づく術はあるのだろうか

赤い服の従者のように
あなたの傍ら
智恵深い言葉に頭を垂れて
時間を過ごす術は

毎日繰り返す後悔の数を
積み重ねた階段では
その高さには届かない

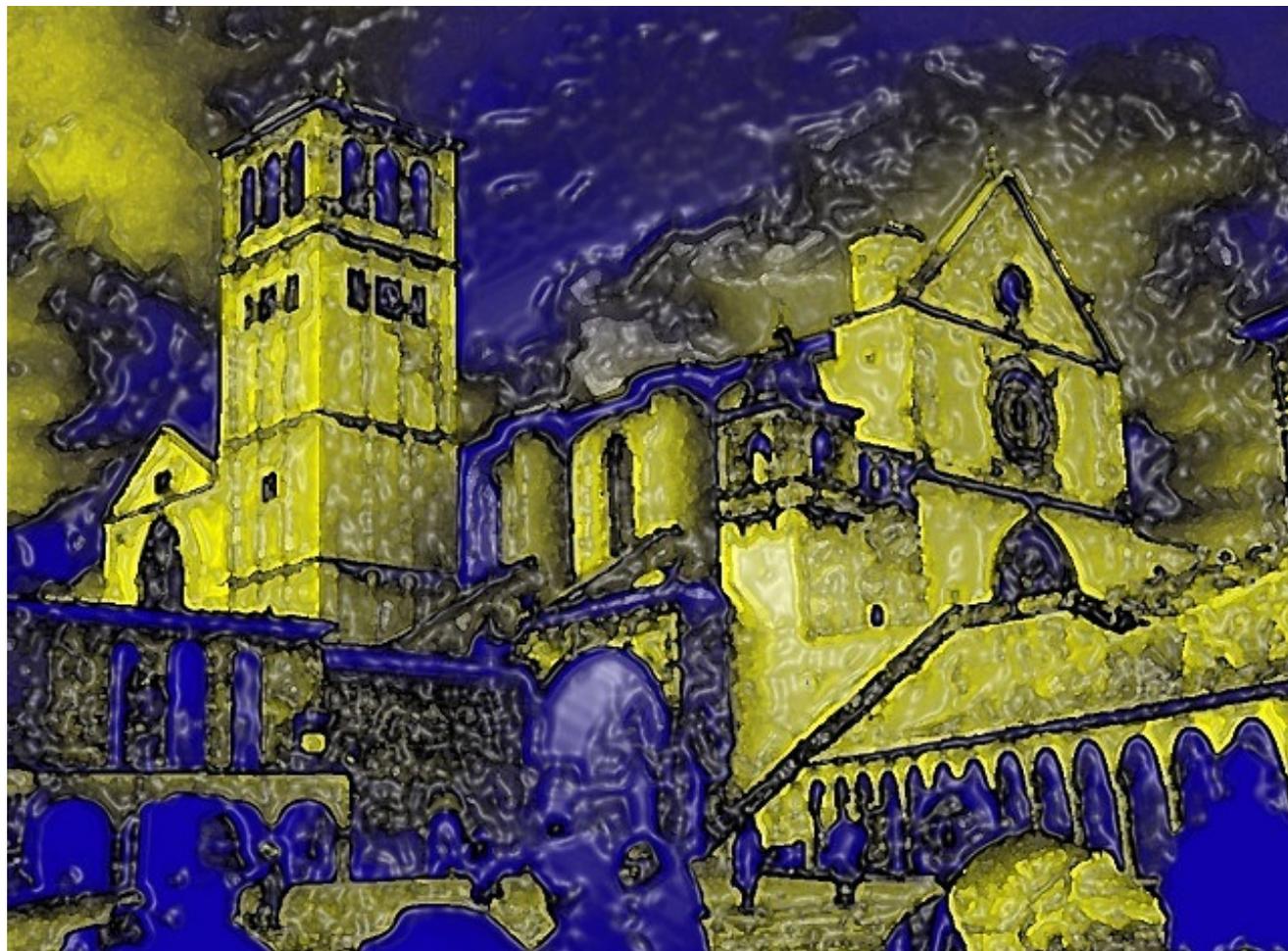
一思いに飛びあがる
白い天使の羽があれば
子供のような無邪気さで
あなたの名前を呼びながら
空を跳ね上がって行くものを

羽の無い僕は
油断を見せない日々の合間に
その手がかりを見つけようと
目を細めて顔つきを悪くするばかり

この大聖堂の中でも
手がかりを手にすることはできずに
しょんぼりと
大聖堂から足を踏み出す僕の瞳には
あなたの姿が傷のように忘れられずに刻まれた

十字架を戴いた大聖堂の屋根の上
白い飛行機雲が棚引いて通る
けれどあなたの心の高みは
その遥か先の先

こんな無力な者の悪あがきでは
きっと触れることも
できないところに と



イタリアでは幾つかの大聖堂に入り見学をしました。自分たちと同じ観光客も多く、あちらこちらでガイドさんの話す声が響くので、厳かさも半減といった感じでした。

それでもスタンドグラスのかもしれない日常とは違う色彩空間の中に身を置くと、気分も落ち着き、意識が自分の中に収斂されていくのを覚えました。幾ばくかの時間を、大聖堂の中で過ごせたら、色々と気持ちの整理が着くのではと、そんな感覚を覚えていました。

外に出ると青い空には何本もの飛行機雲。広場に集まるたくさんの人の声は、大聖堂の中の静寂さとは打って違って、耳にやかましいばかりです。さっきまで自分の中に向かって意識は、もうどこかへと拡散して、何かが分かりそうだと感じた自分が不思議なぐらいでした。

自分の心の平穏を保っておくためには、日常の時間から自分を切り離して見つめ直す時間、大聖堂の中の一時が必要なのだろうと思っていました。

彫刻の街で

彫刻の街で

冷たい大理石のベンチに座る
レオナルド・ダ・ヴィンチの横顔を見上げながら
白い息を吐くこともなく
背筋を立てた人は
どんな思いに沈んだまま身を硬くしたのか

急ぎ足で過ぎる人々は
生の温かさに白い息を吐きながら
目先のことにだけ忙しく思いを巡らす

○

冬の暗闇が肌を襲う頃
ランベルディの塔には灯りが点り
さらわれそうな心を勇気付けてくれる

月影に青白い顔で
考え込んでいるダンテ
その頭に宿るイメージと
あふれんばかりの言葉の破片は
どこからの贈り物だろうか

○

小刻みに震える悲しみで
縁取られたピエタ像
まるでたくさんの涙から
彫り上げられたような

○

どれだけたくさんの眼差しと言葉とが
あなたに注がれ続けたのだろう
そのすべてを受け止めて
十字架の上に残り続ける人よ

○

冷たい冬の雨に
泣き濡れて一人立つ銅像

おまえも誰にも分かってもらえず
一人ぼっちなんだ



*

イタリアでは至る所で彫刻を楽しむことができました。気づかないで通り過ぎてしまいそうな彫刻が実は有名な人を刻んだ物だったり。それが自分の知っている名前であると、何ともないと思った彫刻を「いい作品だ」などと褒めたり、自分の目ほど当てにならない物はないと思いました。

そんな彫刻を眺めながら感じた断片をまとめました。並べてみると何の捻りもないのですが、自分にとっては写真代わりに言葉に写し取ったスナップショットという感じでしょうか。

ちなみに一つ目の詩がミラノのスカラ座広場、二つ目がベローナのダンテ広場、三つ目がサン・ピエトロ寺院で書き留めたもの。あとの二つはどこでメモしたものか正直あまり印象にはありません。

路面電車に乗って

路面電車に乗って

昨日までとは打って変わって
空には機嫌の良さそうな太陽が昇っている

その暖かさに緩んだ厚着の間から
人々の安堵の溜息が零れ落ちて
クッションの代わりになっているのだろうか

石畳の道がどこか柔らかく感じられて
僕の足取りも軽い昼下がり
道の向こう側には
石畳の街にお似合いの
オレンジの路面電車が
エンジンの火照りを鎮めながら
動き出す時間を待っている

その窓辺には帽子を被って
空を見上げる老紳士の瞳
杖を片手にうつむいている老婆の銀髪
眠ったままで起きようとしない赤子の吐息

それぞれが座席の上で
思いのままの時間を過ごす
一度切りの人生の
ありきたりの時間

お互いのことを
干渉しようとは思わない
穏やかな太陽の日差しに

僕も許されることなら
路面電車の座席に一人
何思うことなく空を見上げながら
遠い異国のどこか分からない場所へと
運ばれて行きたい

青い空と見慣れぬ風景に飽きることなく
きつと昼寝を誘うようなスピードで走る
程よい揺れの路面電車に揺られながら

車掌は真面目腐った顔をして
路面電車を安全に走らせようとやっきになって
僕は目の前を流れて行く風景以外には
無関心になって



*

ミラノで道を歩いていたら、路面電車が止まっているのが見受けられました、乗客もどこかのんびりとしたままそれぞれの思いにふけている様子でした。その様子を見ていたら忙しいツアーにせかされて足を早めている自分がどこか滑稽に思われてきて、ほんとうは路面電車に乗り、もの思わずに充実した時間を過ごせればと自分の身を恨めしく思っていました。できることならば陽のあたる特等席を確保していつまでも路面電車に揺られていたい気がしました。

祈りの夕べに

祈りの夕べに

打ち捨てられた教会の
悔しさを語る壊れかけた壁に
夕日がまた赤いベールをかけて
優しくその口をふさぐ
もう何も語らなくていいと
その人はいつでもお前の傍らで
お前の気持ちとともにあるからと

○

どこかへと消えていった
教会の祈り
人々の胸を熱くさせた思いは
星々の世界 夜のしじまに清められ
あなたの胸に抱かれて
眠りにについているのだろうか
赤子のように安らかな思いのまままで

○

今日はあなたが生まれた日
今宵 あなたが思い描いたような
人の世の夜なのか
あなたの答えを聞いてみたくなります

○

僕はその夜の食事をまた
大切な人と楽しく食べている

僕が味わうこともない
あなたの舌にどんなにか苦かった
人の世の最後の食事を口に
あなたの祈りは時間を超えて高められた

教会をいたわる夕日よりも
もっと大きく暖かな手で
独り歩く僕らの背中を
あらん限りに思いやって



クリスマスの夜、旅行に来ていた僕らは、はしゃいで街に夕食を取りに出かけたのですが、いつもは賑やかなはずの街も随分と静か。観光地なのですが人通りもあまり多くはありませんでした。それでもクリスマスを祝うイルミネーションは街を彩り僕らの目を楽しませてくれました。

僕の頭にはふと、今主がここに立って、この風景を見ていたらどんな感想を持つのだろうと、そんな思いが浮かび、暗い夜空に視線を投げかけてみました。いい世の中だと言ってもらえれば安心なのですが、必ずしもそうではないだろうと自信が持てないところに心が少し寒くなるのを覚えていました。

暖かな一皿を

暖かな一皿を

夕日に燃え立つ何もない麦畑に
白い霜が小波をたてている

冷たい北風が小さな町を飲み込んで行く
吸い込めば肺のそこから凍てつきそうな寒さには
なんの慈悲の匂いも感じられずに

冬枯れの木立の悲しみが
次々と僕に向かって倒れこみ
僕の足元さえも覚束なくなるから

広場に体を丸める鳩は
今日は何処に羽を休めるのか
すべてのものの影が
細長くなる石畳の広場には
なんの暖かさの欠片も啄ばめずに

やがて街灯と家の窓の明かりが
寒い舞台の照明となり
我が物顔の寒さが独り
うねりを上げながら演舞を始める

夜の市場を飾る華やかさは束の間のもの
赤いトマト、ズッキーニ、なす、セロリ、タイム
色とりどりの食材が食卓のために捧げられ
熱いオーブンの中で
心温める一皿に変わることを欲する

その周りにはどんな笑顔が集うことだろう
笑い声はこんな寒い夜から
身を守ってくれる
力強いお守りのように胸に居座り

旅人の僕一人だけが帰り遅れて
暖かな居場所を見つけられず
北風に生け捕られたまま
暖かなスープの一皿を恋しく思っている



北イタリアでは随分と寒い思いをしました、雪はほとんど無かったのですが、その分吹く風は冷たく寒がりの僕には骨身にしみました。それでも正直、耐えられないほどの寒さとまではいかなかったのですが、その時の印象をちょっと大げさに纏めました。

とある町では、小さな市場を覗く時間があったのですが、日本では見たことがない食材やハーブ類が所狭しと並び、これを買って料理を作れたら楽しいだろうなと残念に思いました。

冬の夜は家の中で過ごすことが多くなりがちです。体を温めてくれる食事と家族の笑顔があれば、きっと寒さも楽しみに変えて過ごせるものだろうと思いました。

中世の街並みに

中世の街並みに

ひそひそ声のように鬱陶しい雨が
ゆっくりとした歩調の
僕の靴先を濡らしている石畳の坂道の朝

雨に煙る中世の街並みに人通りは少なく
雨を含んで色濃くなる赤レンガの壁
水滴にむせ鈍く鳴る鐘の音
ブロンズの彫刻の肌を艶かしく雨粒が滑り

きつく閉じられたままの扉の向こうからは
中世の生活の匂いが漂ってくるようで
僕の立つ足もとの時間の確かさも失われていく

雨は
何百年もの間 こうして雨は
変わることなく
このレンガ色の街を濡らして来たのだろう
無数に通り過ぎた傘の色を覚えることも無く
恨めしげに見上げた顔つきを思い出すことも無く

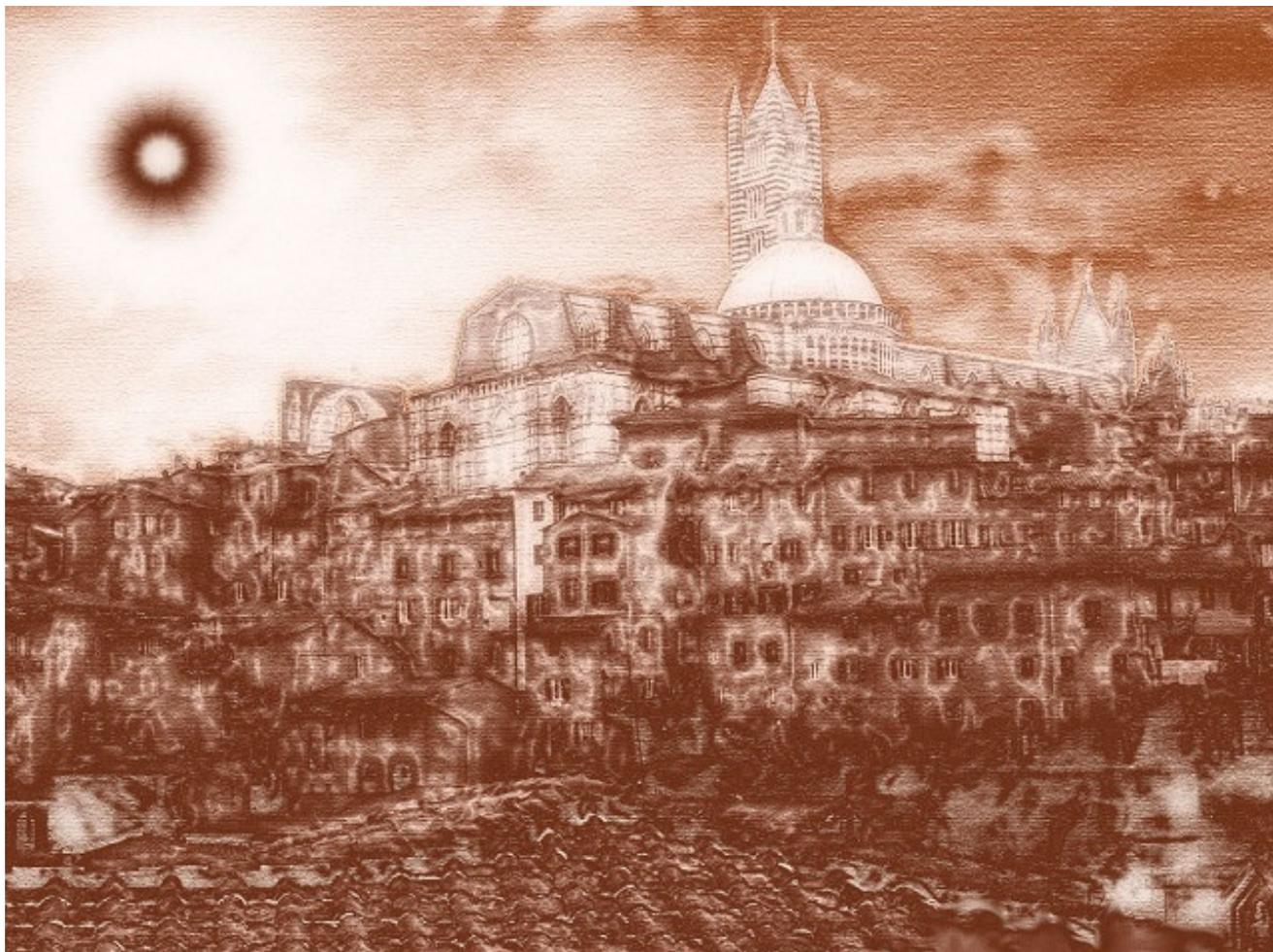
けれどその雨粒よりも多く
この街に生きた人々の思いは
この街の風景に降り注ぎ 沁み込んでいる

壁の模様の一つにさえ
指先 触れれば熱くする 声が聞こえてくるようで
教会の壁の亀裂からは
押さえきれない 祈りの声が漏れている

どれぐらいの雨がこれから
さらにこの街の横顔を洗うだろう

けれどそれ以上にまた
多くの思いがこの街には生まれ

せまい道 古い塀の
顔寄せ合う家々の暮らしに支えられ
人々がお互いの
生の上に 生を重ねながら



この詩はシエナという古い都市を訪れた際の、印象から書き起こしたものです。シエナの歴史地区は世界遺産にも指定されており中世の面影をそのまま残しています。訪問した当日は雨が降っており、クリスマス前だったこともあり人通りが少なくまるで中世に迷い込んでしまったような印象を覚えました。

道幅は狭く、家と家とはお互いを頼りに持たれ合っているようで、きっとこの街がずっと今日まで栄えて来たのは、人々がお互いのことを思いやりながら、寄り添い生きて来たからなのだろうと思っていました。

水の都に

水の都に

小さな引っかけ傷を
何度もつけられる水面
船の穂先が思いがけなく揺れるのは
そんな海のささやかな抵抗だろうか

その度ごとに握られる僕の心臓
海の上にあっては
小さな船さえもがどれほど
頼もしく思えることだろう

生まれたての朝日は
幼げな乳白色をしている
甘えた波の音は
人々の朝の挨拶と混ざりあい
一日の始まりを
毛布にくるまれたままの人の耳に届ける

観光客を招く
土産屋のショーウィンドウが開く
お昼の準備を始めるにんにくの香ばしい香り
オリーブ油が鼻腔にまとわり離れない

潮の香りに混ざり合う
パイプから立ち上る煙
その先に続く
鏡のような海の無尽蔵な恵みに
今日も手を入れ受け取るものを
活気のある市場で交換しながら
人々は生活の糧にする

当たり前の日々の暮らしは
小波の甘い音色を子守唄に
色を変え止まない海原をゆりかごにして
優しく潮風に撫ぜられている
そこから荒々しく抱き起こす乱暴な手が
空から現れることもなく

*

ベネチア本島を訪れた際に、お約束のゴンドラに乗りました。驚いたのは街中に網の目のように水路が通り、家と家との間にも道の代わりの水路。とても不思議に思えました。毎日小波の音を聞きながら暮らす生活とは一体どんなものなのだろうかと自分にはない心象風景に興味を持ちました

きっと毎日が穏やかな繰り返しと勝手な印象でこの詩を書いたのですが、実際にはベネチアでは急激な地盤沈下が進むといった、頭の痛い問題も抱えているとのこと。アドリア海の女王と讃えられたベネチアがこれからも旅人を楽しませてくれることをと、思わずにはられません。



ポンペイの遺跡にて

ポンペイの遺跡にて

明日あなたの微笑が
突然にいなくなったとしたら
この空の下の風景は
どんな風になってしまうだろう

いつものように潜り抜けていた扉の取っ手を
もう握りしめることもできない
昨日までの暮らしがすべて
夢のように消し飛んでしまうとしたら
どれ程までに
在り来たりだった昨日までを
悲しく思い煩うことだろう

たった一瞬で
生活を変えてしまう力は
一体何のための悪戯なのだろう
あるいは悪戯と思うのは
運命弄ばれる人の思いあがり

中空に開いたままの部屋には
青空が無慈悲に侵食している
いつかそこにあった生活の香りの
一切を否定するかのよう

天を指す柱は
支えるべき重さも持たずに
長い年月をうつろなままに立ち尽くす

広い浴場は雨水をためるばかり
劇場の舞台には芸の欠片も転がってはいない

僕は急に思い出す
さっき通り過ぎて来た街の
青空の下の白い洗濯物を
洗剤と潮風の香りと
窓際にそれを広げ
太陽に向けた皺の多い誰かの母の温もりを

僕は人の匂いを身近に感じたくなくて
あなたの肩をそっと抱き寄せていた



ポンペイは悲劇の町です。西暦79年にベスビオ火山が噴火し、一瞬にして灰の中に埋まってしまったと言われていて、18世紀に入り発掘が始まりました。

そんなポンペイの遺跡を歩きながら、一瞬にして生活が変わってしまうことの不思議さ、そうして自分にも決してそれが他人事とは言い切れない怖さを思っていました。ただそれも頭の中での想像で、実感が伴わないものだったのですが。

いつもそう思いながら出来ないこと。自分の身のまわりのものを大切にすること。遺跡を歩く足元から、そんな思いが伝わってくるようでした。